

ガザはどうしてイスラエルを打ち破ったか

ラムジー・バラウド

パレスチナ・クロニクル 2025年1月15日

<https://www.palestinechronicle.com/complete-surrender-how-gaza-defeated-israel-and-what-it-means-analysis/>

イスラエルのベングビール国家治安相は、ガザ停戦を「降伏合意」とよび、ネタニヤフ首相のイスラエル政府を「ハマスへの完全な降伏」と非難した。

今回ばかりは、ベングビールの言うとおりだ。

イスラエル軍は15カ月以上にわたって、ガザでの勝利（ハマスのせん滅と人質解放）のためありとあらゆる戦略を試みてきたが、失敗に終わった。これほど高度な殺戮技術を持つ国が、なぜ自家製武器の戦闘員集団を制圧できなかったのか、より正確には、手製武器に頼る戦闘員集団が、なぜ米英独伊をはじめとする多くの西側諸国や非西側諸国からイスラエルに提供された兵器庫全体を打ち破ることができたのか、アナリストたちが理解するのに何年もかかるだろう。

ガザは20年近くイスラエルによる包囲下であり、その間にイスラエルは大規模な戦争をこの地域に仕掛けてきた。それは2008年に始まり、今回の猛攻撃で最高潮に達した。しかし、今回の戦争は単なる暴力ではない。それは大量虐殺であり、この地域の歴史上前例のない破壊作戦であった。

イスラエルは、メディアの助けを借りて、ガザでのパレスチナの勝利を敗北に仕立て上げようとするだろう。ネタニヤフ首相と過激派内閣の仲間たちは（少数の例外を除いて）、おそらく失敗を軽視するか、物語を歪曲しようとするだろう。

イスラエルがいう「成果」は、戦術的勝利と呼ぶ資格すらない。それどころか、イスラエルの行動はガザを破壊し、女性や子どもを含む無数の民間人の犠牲をもたらした。

イスラエルは、ガザを破壊すればレジスタンスを根絶できると考えていた。しかし、その計算には大きな欠陥があった。ガザでのレジスタンスは、パレスチナの人々と直接結びついている。特定の数の戦闘員を排除して根絶できるものではない。人々とレジスタンスそのものとの間には永続的な絆があるからだ。

この絆は壊れることなく、むしろさらに強くなった。ガザのパレスチナ人を皆殺しにする大量虐殺を行わない限り、イスラエルは抵抗勢力を消滅させることはできなかった。イスラエルのエリヤフ（エルサレム問題・遺産）相などの政治家は、そのような要求を繰り返し、ガザへの核爆弾投下さえ求めた。

結局、イスラエルは失敗したが、医学誌『ランセット』の推定では、何十万人ものパレスチナ人を殺傷した。

今回のイスラエルの失敗は、単に目的を達成できなかっただけでは片づけられない。イスラエル軍は壊滅的な損害を被った。損害は1948年のイスラエル建国以来のアラブ諸国軍とのどの戦争よりも大きい。

これらの損失を与えた草の根の抵抗グループは、旧ソ連のような大国との同盟に頼らずに戦いを続けた。彼らは自分たちの資源、自分たちの人々、自分たちの戦略に頼っているのだ。

この抵抗の意義は、ガザのレジスタンス、レバノンのヒズボラ、イエメンのアンサララなど、地域全体の非国家主体を統一し、単一の戦略で戦ったことで、アラブ世界に反植民地闘争の新しいモデルを導入したことにある。この統一的なアプローチは、イスラエルの経済を弱体化させ、軍隊を圧倒し、最終的には戦場で敗北させることに成功した。

イスラエルは実際に、敗北した。15ヵ月にわたる戦闘の末、イスラエルはレジスタンスに降伏した。この降伏は、イスラエルがガザを再占領することも、レジスタンスを壊滅させることも、パレスチナ人を民族浄化することも、

地域のレジスタンス・グループに対抗することも、これ以上戦争を維持することもできないと認めたことを意味している。

その結果、イスラエルは、ハマスが昨年5月と、7月にも受け入れた停戦条件に戻ることに合意した。これは歴史的な瞬間である。

この敗北は深い反響を呼ぶだろう。それは、パレスチナの抵抗が、決してたちきることのできない統一された性質をもっていることを浮き彫りにしている。アフリカ系アメリカ人の偉大な指導者マルコムXの言葉、"必要であれば手段を選ばない"からインスピレーションを得て、闘いを続けるという人々の決意を再確認させる。

Ramzy Baroud はジャーナリスト、「パレスチナ・クロニクル」編集長

【翻訳チェック 田中靖宏】